

IPstageの自社導入でIP化を实践 沖電気のバックアップが成功の鍵に

東北地方の通信設備工事大手、東北通信建設は沖電気工業のIP-PBX「IPstage」、VoIPゲートウェイ「BVシリーズ」を導入し、本社内IP電話システム、拠点間VoIP網の構築を実現した。沖電気工業の教育サポートを受けながら自社での設計から工事までを行ったことで、ユーザーへのVoIP提案スキル向上も図ることができた。

東北6県全域をテリトリーとする情報通信設備の建設工事大手「東北通信建設」(本社：宮城県仙台市、梅良之社長)は、電話関連の通信工事、機器販売から事業をスタートし、時代の趨勢に合わせ光ファイバー、モバイル関連工事等への拡大を図り、現在では更にIT系事業への転換も進め、ビジネス領域を拡大させている。

今回、同社は本社内IP-PBX、各拠点にVoIPゲートウェイ装置を導入し、8支店15営業所を結ぶVoIPネットワークの構築を実現した。

同社が音声・データ統合を実施した背景には、IP化の急速な進展による通信ビジネスの変化があった。東北通信建設の吉宮能樹総務部長は、「私どものビジネスでもIP化の流れは取り込むべき必須課題となっていました。VoIP化による通信コスト削減も目的

東北通信建設株式会社
設立：1965年2月15日
代表取締役社長：梅良之
従業員数：622名(平成15年9月30日現在)
主な事業内容
・電気通信設備の設計・施工
・情報関連機器の販売
・一般土木の測量・設計・施工



としてありましたが、まず、自らがVoIP・IP電話システムを導入し、使いこなせるようになることで、お客様により説得力を持った提案ができるようになることを考えたのです」と説明する。ここで採用されたのが、沖電気工業のIP-PBX「IPstage」とVoIPゲートウェイ「BVシリーズ」だ。

IT本部の高橋一夫本部長は、「2001年の春頃から国内外ベンダー各社のVoIP製品の比較検討を進めてきました。さまざまな側面から評価・検証を行った結果、音声品質、操作性、そしてサポート面における柔軟な対応等を評価し、沖電気工業の採用を決めました」と話す。また、IT本部の岡村善博担当課長も、「すでに私どもは沖電気工業のBVシリーズを活用し、お客様にVoIPネットワークの提案・構築を行って来ました。そこで音質の良さはすでに認識していました」と語る。

事前教育でスムーズな導入実現

IT本部では、本社へのIP-PBX導入に先駆けてIPstageを購入し、実機を用いた事前検証を開始した。同時に沖電気工業からの教育サポートも受け

沖電気工業株式会社

- PART1 「IP電話普及推進センタ紹介
- PART2 音声品質評価ソリューション
- PART3 コンサルティングソリューション
- PART4 教育ソリューション
- PART5 機器実証ソリューション
- PART6 オープンソリューション
- PART7 ネットワーク構築事例
- PART8 「IP電話普及推進センタ紹介
- PART9 e音ソリューション
- PART10 ネットワーク構築事例3

東北通信建設株式会社
総務部長
吉宮能樹氏



東北通信建設株式会社
IT本部
本部長
高橋一夫氏



東北通信建設株式会社
IT本部
担当課長
岡村善博氏



た。高橋本部長は、「沖電気工業からIPstageの設定方法をはじめ技術的なレクチャーを受けました。具体的なVoIP提案時のポイントなどビジネス面にまで及ぶ教育も受けることができ、製品や販売に対する理解がより深まりました」と話す。

沖電気工業からの営業・技術研修を受けた後、いよいよ東北通信建設はVoIPシステムの導入を開始した。

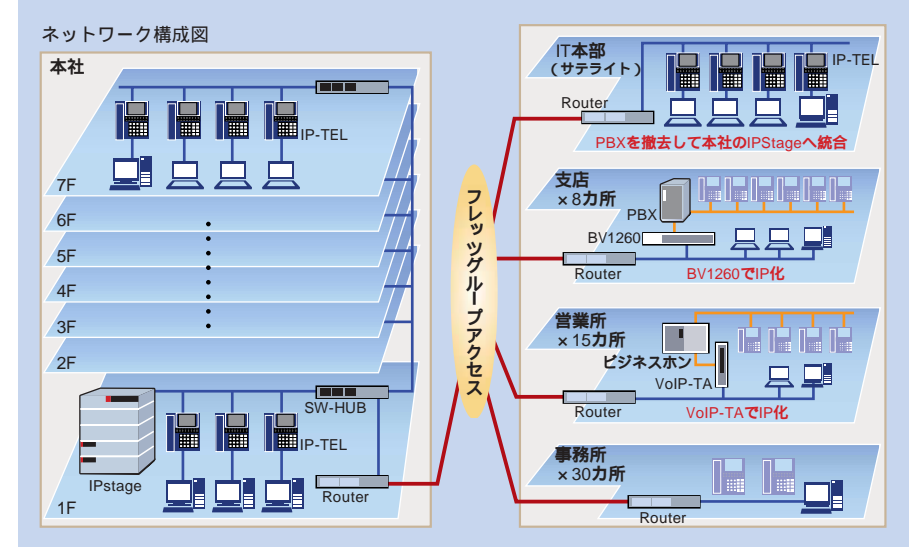
まず2002年3月、本社へのIPstage

の設置を行った。本社内の基幹LANも光配線によってギガビット化し、フロアネットワークもイーサネットによる100Mbps回線へリプレース、既存の電話配線も撤去した。構内配線をすべてイーサネットに統合、IP化したことで、電話機の移設工事も非常にスムーズに行えたという。

また当初、IP電話端末の新規大量導入に伴い、社内のIPアドレス体系も変更する計画だったが、ここではIPstageのVLAN機能を用いドメインを分割。従来のアドレス体系に変更を加えずに導入することができた。岡村担当課長は、「DHCPサーバーを設置していなかったため、各端末機器へのIPアドレスの振り直しが発生するだけでなく、全拠点のルーティング設計も変更しなければなりませんでした。IPstageのVLAN機能によって煩雑な変更作業を回避することができました」と話す。

続いて2003年3月に本社と同じ仙台市内に設置されたIT本部のPBXを撤去、電話機をすべてIP端末に入れ替えた。これにより、本社内に設置されたIPstageに音声システムを統合し、IT本部のサテライトオフィス化を実現した。

さらに同年11月には、NTT東日本のフレッツグループアクセスを利用し、従来VoFRで構築していた8カ所の支店と新たに15カ所の営業拠点をVoIP網で接続した。大規模拠点となる支店ではVoIPゲートウェイ装置BV1260を用い、中小規模オフィスの事業所はVoIP-TAを設置した。



拠点への展開にあたり、事前に岩手県の拠点で試験導入を行い、その後一斉に各拠点のリプレースを行った。すでにVoFRを用いたネットワーク構築の経験があったことに加え、現地調査や手順書の作成等、入念な事前準備を行ったことが功を奏し、導入作業は大きなトラブルもなく行うことができた。高橋本部長は、「設定や工事はすべて自社で行いましたが、沖電気工業からは不明点に対する迅速な回答や設定方法に対する情報開示を行っていただいたことで、スムーズに導入できました」と評価している。

自社導入でビジネス上の効果も

音声品質についてもADSLをアクセス回線として利用する際に心配していた劣化や遅延は発生していないという。吉宮総務部長は、「当初想定していた通り、音質は従来とまったく遜色ありませんでした。むしろIP化と共に社員の提案等についても具現化できる可能性

が広がったと考えています」と語る。

また、今回のVoIPシステム導入とデータ通信を含めて年間約1000万円の通信コスト削減を見込めるという。

ビジネスにおける効果も現われ始めた。自社導入したことによって、VoIP案件が拡大しているというのだ。

高橋本部長は、「私どもの本先にユーザーを招いてデモンストレーションを行ったり、客先に実機を持ち込み、音声品質を確認してもらったりしています。自社構築によるノウハウ取得がユーザーに対する説得力、安心感につながっていると実感しています」と強調する。

東北通信建設は、今後の展開として050番号を使ったIP電話サービスとの連携も視野に入れている。さらにVoIP、現在ISDN回線を用い運用しているテレビ会議システムをIPネットワークへ移行させるための検証も行う等、さらなるIP化への取り組みに乗り出している。